週　報
こひつじ
第41巻　4号
大津キリスト教会
菊池郡大津町室 119
TEL 096-293-4470
FAX 096-293-4961
牧師　米村　英二

すべてのことを見分けて

その二　ほんとうに良いものとは

人生の困難に遭遇したとき、私たちの心は動揺し、何をしてよいかわからなくなる。

そのとき求められるものも、「すべてのことを見分けて」、なすべき最善を見出すことなのではないだろうか。

ロビンソン・クルーソーの話をご存じだろう。その物語は、主人公であるロビンソンが父親から説教され、訓戒を受けているところから始まる。

彼は、今自分がいるところがいやである。船乗りになって遠くへゆき、荒稼ぎをしたくて仕方がない。が、そんな彼を戒めるように父親がこう言うのである。

「おまえの兄も、海外に飛び出して、今どこで何をしているのかわからない。どうしておまえまで、そんないちかばちかの幸運を求めたがるのだ。世の中でいちばん幸福なのは、上流の人びとでも下流の人びとでもない。われわれ中流の人間なのだ。自分の土地を持ち、だれの世話にもならず、自ら働いて自分の糧を得る。そういう自活の道にこそ、いちばんの幸せがあるというものだ」

しかし彼は父の言うことを聞かず、とうとう海外に飛び出してしまう。そして二度目の航海で難破し、あの孤島に漂着するのだ。

最初は、助けを求めて、浜辺で、ただ涙を流すだけの日々を送っていたが、それが何の未来もつくり出さないとわかると、ロビンソンは父親の訓戒を思い出し、それに従う決意をする。

その訓戒とは、当時のイギリスにおける中流層を占めるプロテスタントの人びとの基本的生活態度であり、自分の置かれたその場所で、与えられたものを用いて、最善を尽くすというものだった。

そこでロビンソンは、自分に起こった不幸を嘆くのをやめて、これからの孤島における生活と正面から向き合い始める。

彼は思う。

確かにこの孤島で暮らさなければならないのは不幸だが、すべてが不幸ということではない。

第一、仲間はみな死んだのに、自分はこうして生きている。

第二、交わる人もなく、孤独ではあるが、幸い、ここは不毛の土地ではない。人はいなくても、食べ物は十分ある。

第三、暑い気候の島であったことも幸運だった。着るものがなくても、何とか生きていける。それに感謝すべきは、船が岸辺まで押し流されてきたことだ。多くの物資をそこから取り出すことができるのだから。

このようにロビンソンは、自分の置かれた状況をつぶさに観察し、自分にあるものとないものを書き出し、バランスシートを作る。そして、ないものを求めず、あるものの中から、使えるものを見つけ、その後の生活を建設してゆくのである。

これも「すべてのことを見分けて」、良いものを見出すという行為なのではないだろうか。

有名なラインホールド・ニーバーの祈りも、そのことを教えている。

主よ。
変えられないものを
受け入れる心の静けさと、
変えられるものを
変える勇気と、
その両者を見分ける英知を
われに与えたまえ。

人生には、変えることができな

いものがある。

たとえば過去だ。それはすでに私たちの手から離れており、悔やんだからといって、どうにかできるものではない。それはもう終わったのだ。

さらにまだ来ていない未来も私たちの手のうちにはない。イエスが、「だから、あすのための心配は無用です」（マタイ 六の三四）と言われたのはそのためだ。

では、私たちの手にあるものとは何か。

今日である。それだけである。

そして今日をどう生きるかは自分次第なのだ。

聖書は言う。

「今は恵みの時、今は救いの日です」（第二コリント六の二）

神が恵みをもって私たちに働いてくださるのは、明日ではなく、今日だけであるというのである。

だとすれば、私たちのなすべきことは明瞭である。

今日の仕事に全力を尽くすことである。それが私たちに与えられた「もっとも良いこと」なのではないだろうか。（続）

****

今日の礼拝

****

○第一礼拝は午前一〇時から、第二礼拝は午前一一時から。

○教会学校は午前一〇時から。

○説教は米村牧師。

****

先週及び先々週の礼拝

****

一月一九日の説教は岩崎宏志さん。一月二六日の説教は江藤洋子さん。証は石山宗孝さん。

****

感謝とお願い

****

私たちの教会は、創立以来、席上献金をせず、信徒の皆さんの自由献金で支えられてきました。しかも、毎年一千万円を超えるのですから、決して少ない額とは言えません。それは、この教会を維持してゆこうという皆さんの強い意志のあらわれであって、心から皆さんの尊い犠牲に感謝したいと思います。

教会の使命は、日曜日ごとの礼拝や週日の小集会などによって、広く日本の社会に神の言葉を語ることです。宣教師がこの地で伝道を開始して以来、五五年が経ち、現在、一〇〇名を超える方々が、この働きに参加してくださっています。同時に、教会の高齢化も進んでいます。この働きが、次の世代に引き継がれることは急務です。ぜひそのために祈っていただきたいと思います。

****

牧師身辺

****

一月二〇日（月）から一週間、ＣＦＮＪ聖書学院で一〇回の講義をするはずでした。ところが最初の日、二回の講義をぶじすませ、夜、休もうとする頃に、悪寒がします。翌朝、熱を測ると七度二分。迷惑をかけてはいけないので確認のために近くのクリニックで検査してもらったら、コロナに感染していると言われ、愕然としました。感染後は5日間の隔離です。結局、残り八回の講義はできず、ひたすらベッドに寝るという毎日で、学生たちには大変申しわけないことをしてしまいました。三日後には、熱も下がったのですが、それでも隔離は続き、療養生活を強いられました。きっとぼくには休養が必要だったのだと思います。

実は、途中、東京で長男の耕一家族と夕食を共にすることになっており、少し時間があったので神田の古書街へゆくと、見つけた本が富田高慶著『報徳記』。四六〇ページからなる大著です。その重い本を持って札幌に着くと、待っていたのは五日間のベッドの生活。ひたすらその本を読み続け、とうとう完読しました。感動的な本でした。

二六日の日曜日は、会衆はだれも気にしないので、ぜひ礼拝説教をと勧められ、札幌の菅原先生の教会でご奉仕させていただき、少しほっとしました。